

なくそう貧困。命の水を！

アジアネット

JAFS

NEWS & REPORTS 2017年春

129



特集 日印コスモニケタン開校20周年

2015-16 DONATED BY



JAFS

since 1979
公益社団法人アジア協会アジア友の会
Japan Asian Association & Asian Friendship Society



目次

「巻頭言」水のありがたさ知って井戸寄贈	02
特集＝日印友好学園コスモニケタン20周年	
学びの平等を目指して歩む	04～07
厳かに式典——現地レポート	08～10
里子・キラン君の家庭を訪問	11
ネパール大地震から2年	12
フィリピン台風被災地に緊急支援	13
海外からの報告	
スリランカ／中国／インド	14・15
SDGs——JAFSの目指す方向と一致	16・17
井戸寄贈報告	18～21
熊本地震から1年	22
「JAFS プラザ」＝国内の活動	23～25
クリスマスプレゼントで心の交流15年／	
雪の金剛山に行く／助産婦半世紀の軌跡	
を講演 ほか	
遺贈・遺産相続による寄付について	26
「新・The 社会貢献」法人紹介	27
新入会員ご紹介・領収報告	28・29
「里子の笑顔」「アジアの友から」	30
「環境コラム」	31

アジア協会アジア友の会とは

アジア18カ国に井戸を贈る国際協力団体（NGO）です。1979年に大阪で設立。誰もが生まれてきて良かったと思える社会を目指し、井戸建設（累計1847基）や植林（累計249万本）、子ども教育支援を中心に活動しています。

全国都道府県認可の社団法人取得第1号団体です。2012年4月1日からは、内閣総理大臣の認定を受け、公益社団法人になりました。

海外との交流・協力活動は、インド、インドネシア、バングラデシュ、タイ、マレーシア、フィリピン、スリランカ、ネパール、韓国、カンボジア、シンガポール、ミャンマー、ラオス、中国、ベトナム、モンゴル、パキスタン、アフガニスタン、さらに西アフリカのブルキナファソにも広がり、友情のネットワークが形成されています。

日本国内でも、各地でチャリティープログラム、自然環境プログラムなどを行っています。

※ホームページ <http://jafs.or.jp>

本会への寄付は、寄付金控除の対象です

JAFSは内閣府より公益社団法人としての認定を受けています。JAFSへの寄付金や会費（社員会費は除く）は、申告によって、所得税、法人税、相続税について税制上の優遇措置（寄付金控除）を受けることができます。

確定申告の際、税額控除、所得控除のいずれか有利な方を選択できます。本会発行の領収書を添付して申告してください。法人税は損金の額に算入することができます。相続税は最寄りの税務署などにお問い合わせください。

巻頭言

私が初めて海外と関わりを持ったのは、今から約40年前の学生時代、メキシコへの留学と称する遊学で中南米13ヶ国を1年かけて旅した時です。

期待と不安が合わさったバックパッキング旅行。もちろんバスポートは肌身離さず、現金も腹巻に入れ、イミグレーション（空港などの出入国カウンター）を通過するたびにとても緊張していたことを今でも思い出します。

移動はバスが中心で、1日数ドルの安宿を選んで、まともな布団もないため持参の寝袋で寝たりしていました。

中南米の人たちの、貧しいながらも屈託のない笑顔と陽気で温かい人柄に、ずいぶん助けられました。食事をごちそうになったり、自宅で泊ってもらったりと、楽しい思い出が多く、嫌な思いはほとんどありませんでした。

その旅で感じたことは、やはり日本の素晴らしさ！

安心・安全、そしてある程度整った社会インフラ……蛇口をひねると流れ出る安全できれいな水。今までの当たり前がいかにありがたいことを改めて気付かせてくれる旅で

水のありがたさ知って井戸寄贈



米田 明正
アジア協会アジア友の会 理事

もありました。それ以降、海外との接点は全くない時期を過ごしましたが、心の中は何かしら関わりを持ちたいと思っていました。

JAFSとのお付き合いは、息子二人が「土と水と緑の学校」でお世話になって以来20年近くになります。中南米の旅の思い出もあつてか、会社からアジア各国に井戸の寄贈を続けており、今では30基を超えるま

困っている人がいる。援助を求めている人がいる。それに応えるのはとても自然な考えであり行動だと思います。JAFSの活動は、正にその思いを体現しているのではないでしょう。

ODA（政府開発援助）ではできない部分をNGO（民間国際協力団体）が担い、民間レベルでアジアの人々との友情と信頼を基に様々な支援を行うことの重要性を、JAFSの活動を通して肌で感じるようにな

つてきました。

「なくそう貧困。命の水を！」。

JAFSは井戸やパイプライン施設の事業だけでなく、植林や再生可能エネルギー等に関連しての環境事業、マイクログレジットや職業訓練ほかの貧困対策事業など、その活動は多岐にわたっていることも初めて知りました。

その活動は、色んな方々の利他の気持ちが集まって支えられています。

弊社の経営理念の中に「多くの人のお役に立つ」という一文があります。また「与えられるより、与える人になろう」と社内では言っています。

昨年6月より縁あってJAFSの理事の一員になったのを機に、微力ではありますが積極的に協力していると考えている次第です。

プロフィール

1956年、大阪生まれ。
1979年、中南米13ヶ国を一年間バックパッキング旅行。
1981年、大阪外国語大学2部スベイン語学科卒。
1991年、株式会社グローアップ社長就任。

JAFSのキャッチフレーズが本年から「なくそう貧困。命の水を！」に変わりました。

JAFS 会員綱領

私たちは、世界の平和と人間の基本的な権利を守るために人々との「友情と信頼」に基づく「理解と協力と連帯」の輪をアジアと世界に広げます。

かかる目的をもって私たちJAFS会員は以下のことに努めます。

一、より人間らしい地球社会の創造をめざします。

一、アジアと世界の人々の幸せに奉仕します。

一、地球の自然環境を大切に守ります。

一、生活の無駄を省き、地球資源を大切にします。

一、これらの奉仕活動を通して、自分と他人の生命の価値を高めます。

以上

学びの平等、貧しい子らへ

日印友好学園コスモニケタン 開校20周年

インドの貧しい農村の子どもたちが学校に通って学べるように、JAFSと現地の提携団体BSVIA (Bhateeya Small and Village Industries Association) Ⅱバルティヤー小規模村工業協会が協力して同国南部のカルナータカ州ビジャプールにつくった「日印友好学園コスモニケタン」が、1996年11月の開校から20周年を迎えました。

この間、多くの支援を寄せてくださった方々、子どもたちの里親となってくれた皆さまに、改めて感謝を申し上げます。まさに日印友好の証とも言える設立当時の歩みをふり返り、2月に現地で行われた20周年記念式典をはじめ、現在の学園や生徒・先生たち、村の様子などを、日印双方の視点からお伝えします。



朝礼で校庭に集まったコスモニケタンの生徒たち。全員が起立姿勢で神への賛歌や国歌・州歌を斉唱する。2月25日、いずれもインド、カルナータカ州ビジャプール

緑の大地に「宇宙と出会う場」を

私は、貧しい子どもたちが堂々と行ける全額ただの学校を作ればいいのではないか、という気持ちで以前から持っていた。車の運転をしていた現地のパートナーであるクンパール氏に、この考えをどう思うかと聞いてみた。彼もできるならばそうしたいと言った。井戸の協力ができるのだから、学校も協力できるのではないか。問題は、あの魅力的な土地が手に入るかどうかである。クンパール氏は調べてみると、土地の所有者はこのあたり一帯の地

現地の人々と力合わせ

今から24年前のこと、南インドの11月。それは枯れ果てた草木が息を吹き返す季節である。雨季のあとに一斉に芽を出し、赤茶けた大地を緑のじゅうたんに変えていく。1993年11月のある日、輝く太陽の光を浴びながら、ビジャプール市から近郊の村・カドレワドへの途中、いつも走る国道とは違う村の裏道を行っていた。交通量のほとんどない朝の田舎道は爽快で、大地の新鮮な匂いが何とも





生徒・先生たちが総出で植樹。元は草がまばらに生える野原だった学園の敷地（左上）に、力を合わせて緑を増やしていった＝2002年

日印友好学園コスモニケタンの歩み

- 1993年 JAFSの村上事務局長がビジャプールの井戸建設地を視察し、学校に行っていない子どもが多いのに気づく。支援会方式を用いて全額無料の学校を作ることをBSVIAに提案。設立の準備始まる。
 - 1994年 ビジャプール市、カルナータカ州政府からハイスクールが必要と要請。JAFSが実行委員会をつくって一教室寄贈運動を始め、寄付金で建設用地を購入。
 - 1995年 同州政府が「日印友好学園コスモニケタン・ハイ・スクール」の名称で設立許可。5月、校舎建設着工。6月、第1期生58名入学。建設飯場の仮校舎で授業開始。
 - 1996年 11月、5教室の校舎完成。第2期生80人入学。
 - 1997年 6月、現地住民から小学校開設の要望が出され、仮校舎で授業開始。
 - 1998年 4月、給食室完成。6月、図書館完成。
 - 1999年 2月、第1期生56名が卒業。
 - 2000年 3月、第2生徒寮兼学生ホール完成。10月、大雨で小学校仮設校舎破壊。
 - 2001年 1月、小学校校舎建設資金集めに近隣村の音楽奏者を日本に招きチャリティー演奏会（収益370万円）。
 - 2002年 3月、小学校校舎完成。6月、外務省の草の根無償資金援助で敷地内に農業訓練センター完成。
 - 2003年 JAFS会員・池田無事朗氏の母校関西学院中等部に同氏の提供で海外教育支援基金が創設され、03年から5年間、コスモニケタンの活動・施設増設等の資金が提供されることになる。この基金で、職業訓練、各種研修、多目的教育施設やコスモニケタン・センター建設などの総合学園計画が決まる。12月、学園隣接地約4畓購入。
 - 2004年 6月、センターの工事が始まる。05年5月、教室兼研修棟完成。06年6月、教室兼講堂及び食堂完成。
 - 2007年 4月、サラマテセンター（池田会館）完成。8月、同センターでアジアユース・サミット開催。10月、コスモニケタン運営支援のためJAFSに育成会結成。
 - 2009年 6月、インド政府認可職業訓練技術学校（農業科・工業科）が発足。
 - 2012年 8月、クンパール家五男プロノウ氏がBSVIA理事長に就任。コスモニケタン管理責任者となる。コスモニケタン・センターで地域開発セミナー実施。セミナー参加卒業生からコスモニケタン同窓会結成の発議。
 - 2013年 8～9月、村上事務局長がコスモニケタン訪問。運営支援形態を里親制度に変えることで同意。
- <注>インドの学制は日本と異なり、小学校1～7年生、ハイスクール（日本の中学校相当）8～10年生、カレッジ（日本の高校相当）11～12年生です。

立に向けて動き始めることとなった。設立当初は、子どもが学校へ来るのをためらっている農村の一軒一軒を訪ねて、農村の少年少女わけても「少女の教育への投資は世界中で最善のものである」というマハトマ・ガンジーの思想を話し、親たちに子どもを学校へやるよう助言した。近隣に学校がなかったこともあって、みな喜んで子どもを行かせることにしてくれた。

日本の支援でできる学校で、折紙や土足禁止など日本流の特徴があったので、何か新しいことがあるかという期待と同時に、警戒もあった。それ

に対しては、まず給食を支給することで、来る子が増えてきた。教科書代も無料で、最初は40人の生徒でスタートしたが、年々増え続けた。

先生は熱心で、子どもの成績は優秀だった。毎年アジア国際夏期学校（A I S S）に遠い日本の小中学生が来るのが刺激となり、自分たちも頑張ろうとの思いがあったのだ。学校は地域でよい評判を得た。カルナータカ州政府も、学校と教育制度を賞賛し、設立時の中学校に加えて高校も作った。

しかし、小学校レベルの勉強ができていないことが判明した。親たちから

の希望で、小学校も開設した。資金は、インド音楽ができるクンパールの家族などによるチャリティーコンサートを、A I S Sに参加した青少年が中心となって日本で開催して集めた。

小学校、中学校とも、村のほとんどの子が来ていた。子どもの教育の成果が目に見えたので、自分は教育を受けていない親（農民や肉体労働者）たちも、子どもを学校に行かせた。

初めの5年間はいろいろな村から子どもたちをトラックで運んだ。カルナータカ州政府道路交通部が学校の努力と教育に敬意を払い、子どもたちが

主で、すでに井戸プロジェクトを通じてJAFSのことを知っていた。彼の村にも本会の井戸が作られていたからだ。そして幸運にも、彼は教員免許を持っていた。この話に賛同し、土地の提供にに応じてくれた。早速、彼を中心に学校計画は進められた。

95年3月、ビジャプール市より、申請から数か月で学校設立許可が下りた。日本では考えられないスピードである。日本の協力で学校ができるとうわさがたちまち広まり、まだ校舎、教室もないのに、入学希望者が押し寄せた。クンパール氏から、希望者を放っておけないので、仮小屋でもよいから教室がほしいと要請が来た。

我々は慌てた。本会の理事たちに相談をしたところ、井戸のように、一人が一教室の費用を集める運動をやるということになった。早速手分けして、数教室分の資金が集められた。現地で資材倉庫を作り、11月から授業が始まった。土地を提供してくれたヤンカンチさんが副校長に就任した。

お陰で、年を追うごとに団体、個人から多くの寄付協力が得られた。校舎、図書館、食堂、理科室、職員宿舎等の施設が徐々に整備されていった。外務省の支援事業にもなった。

学校を「日印友好学園コスモニケタン・スクール」と名付けた。インドが生んだ偉大な詩人・思想家、ラビンドラナート・タゴールが120年前、東北インドの寒村に設立した「シヤンテニケタン（平和な出会いの場）学園、現インド国立タゴール国際大学」にちなみなのである。

宇宙を意味する「コスモス」と、出会いの場を意味する「ニケタン」との合成語である。学びとは宇宙の真を知ることであり、教育は、世のため、人のためになる人材の育成を図ることであるとの思いからそう名付けた。

現在は、約10軒（約4万平方メートル）の土地に小・中・高校舎はじめ、講堂、農業センター、職業訓練技術学校、JAFSセンター等が点在している。

（JAFS事務局長 村上公彦）

「教育は世界で最善の投資」 ガンジーの思想で親を説得

1993年に村上公彦氏がビジャプールを訪れた際、私に人生の最後にしたいことは何かと聞かれたので、基

本的な生活に必要な教育を農村の少年少女たちに提供することですと申し上げた。村上氏と意思が一致し、学園設

無料バスで通えるようにしてくれた。設立時からコスモニケタンハイスクールのよい結果を得、誰もがJAFSの貢献に深く感謝している。ビジャプール地域のスポーツ大会や卒業試験の成績も、どれも同校が最高である。

2009年には中学校を卒業した生徒を受け入れる専門学校（ITI）も開設し、現在、小学校からの生徒総数は479名と大きくなっている。

BSVIA前代表の故H・G・クンパールの遺稿、現代代表ナンディーニ・クンパール（娘）とパベツシュ・クンパール（息子）の原稿を統合編集



樹々とともに健やかに育て

コスモニケタン現地レポート

厳かに楽しく、学園あげて式典

朝6時50分、悠久の大地に真っ赤な太陽が昇る。大自然の息吹を感じる一瞬だ。日中の気温は34度、湿度22%。猛暑だが、低湿度のため爽やかだ。この大地に日印友好学園コスモニケタンが開校して20周年を迎えました。現地で盛大に催された記念式典と、その前後に取材した卒業生・生徒たちやその家庭の近況についてレポートします。
(JAFS 監事 柿島裕)

2月23日午後2時半、生徒たちによるにぎやかな太鼓の演奏とともに、日本からの参加者13名が歓迎行進しました。次いで、生徒たちの作品を見学。文化祭のような感じで、①洪水報知器などの科学作品②手芸作品(同時に即売)③ランジョリという色鮮やかな砂絵(見学者によるコンテストも行われた)が展示されていました。

記念式典は、5名の女子生徒による神への賛歌で幕を開けました。コスモニケタン学園の理事長はじめ幹部や日本からの参加者は全員、壇上の席に座りました。校長先生による歓迎スピーチの後、来賓、功労者、日本からの参

壇上に学園の創設者、故H・G・クンパール氏の肖像が飾られた記念式典で、ヤンカンチ先生がこの1年の成果などを報告した。2月23日、いずれもインド、カルナータカ州ビジャプールの

加者全員が、「チャップレー」という拍手を意味する歌とともに歓迎を受けました。

さらに、神への感謝を表す点灯式。神妙な顔で式典に臨んでいる最前列の子どもの姿が健気でした。州教育長、報道機関幹部ら来賓のスピーチでは、創設者クンパール氏への謝辞、JAFSの強力なサポートと遠路参列した日本人への感謝などが続きました。

日本側を代表して、JAFS村上専務理事、小原副会長もあいさつし、記念品としてチャイムの鳴る大時計を寄贈しました。さらに、ヤンカンチ先生が、コスモニケタンのこれまでの歴史と1年間の教育成果について報告しました。様々な分野の成績優秀者に対して、クンパール基金、ギリッシュ基金より表彰が行われました。式典の後は夜11時過ぎまで延々と、

ステイソングと、日本語で「上を向いて歩こう」を披露しました。振り返ると黒山の人だかり。父兄や村人たちが

我が子を一目見ようと来たのです。空は満点の星。大音響のインドミュージックが空に木霊していました。

気さくな寮生たちから握手攻め

記念式典の前夜、寮を訪ねました。現在、寮生は全員男子で26名。その日は19名が、夜遅い時間にもかかわらず

歓迎してくれました。もうすぐベッドが入る予定ですが、今は床に簡易的な布だけで寝泊りしています。

私たちが彼らの日課などを尋ねると、競うように手を上げて、熱心に答えてくれました。同下。

朝5時半に起床して勉強、夜も夕食後に勉強して22時半就寝。実によく勉強します。将来の希望は、軍隊、警察、医者など、国や人を救う公的な職業を希望する子が多くて頼もしい。彼らの親はほとんどが農業で、その家計を助けたいとの思いも強いようです。

とにかく、明るく気さくで、何度も握手を求めてくる彼らの輝く瞳は忘れることができません。

今回の式典には、同

校の児童・生徒を支援しているJAFSのコスモニケタン里親6人も参加しました。JAFSのスタッフと一緒に同校の先生たちと話し合いを持ち、コスモニケタンの子どもたちがおかれている状況について聞くとともに、学校の将来についても話し合いました。

明見睦子さん(大阪府枚方市)、辻本選手さん(奈良県生駒市)は、日本から持っていった鍵盤ハーモニカの演奏方法を先生たちに指導。式典で日本人参加者たちが歌ったコスモニケタン20周年のバースデイソングを演奏しました。渡部高明さん(堺市)は、寮を訪ねた一行に参加し、寮生との交流を深めました。渡部さんは次のように話しています。

「コスモニケタンを訪れたのは3回目です。子どもたちは、学校がきれいで、雰囲気もよいのに驚いています。学校ができたことで、地域の人たちの教育への関心が高まりました。さらに子どもたちの意識が変化する中で、親の意識も変わってきました。他方、日本の青少年たちもこの学校を訪れ、多くのことを学んで帰国しています。今後の里親制度の課題は、日本側の支援の拡大とコスモニケタンの自立サポートではないかと思っています。里子を支援することで、里親の奉仕の思いがより充実できるようにしていくことが肝心だと思います。今後、卒業生による同窓会ができればいいですね」

生徒たちによる素晴らしいインドダンスのオンパレード。写真上。一所懸命に練習したであろう成果がにじみ出ており、皆とても生き生きとしています。天性の才能なのか、とてもダンスがうまく、毎秋、神戸で開催されているインディアンメーラーに参加してほしいくらいです。

途中、我々日本からのメンバーがカンナダ語でコスモニケタン20周年バ



里子のキラン・ワッダール君



カレッジ進学・警察官を夢見て



卒業生たちはトップを目指す



記念式典の日、第1期生（2001年卒業）と第2期生（2002年卒業）の3人が学園を訪ねてきました。現況や在学当時の思い出などを語ってもらったので紹介します。

Dayagood, A. Toravi さん（02年卒、29歳、英語科教師、写真左端）、J. V. Jochoog さん（01年卒、30歳、銀行員、同中央）、Basovaraj, D. Hosamani さん（01年卒、30歳、カナダ語教師、同右端）です。ともにコスモニケタン学園ハイ

クール（日本の中学校相当）卒業後、地元のカレッジ（日本の高校相当）2年間を卒業、さらにユニバーシティ（大学）3年間を経て就職しています。ハイスクールでの3年間の勉強はとても役立つと述べ、特に良い先生に出会えたことを異口同音に感謝

「先生ありがとう」と答えて着席

2月25日9時半、全校生徒が校庭に集合し、厳かに朝礼。一昨日の記念式典でインドダンスを踊っていた時とはまるで別人です。神への讃歌、国歌・州歌斉唱の後、点呼。その後、プライマリスクール、ハイスクールの順に授業参観しました。

参観したのは、ヒンディー語、カナダ語（地元の言語）、英語、科学、歴史などですが、印象に残ったのは5年生の英語。男女混合（男子11名・女子6名）ですが、席は教室の左右に分かれています。先生が「Sit Down（座りなさい）」と言うと、生徒全員が「Thank you for teacher（先生ありがとう）」と答えて座ります。先生と生徒の上下関係が明確で、生徒たちの先生に対する尊敬の念も大きいことが見受けられます。その日は自己確認テストをしていましたが、チェックポイントに「I Love my teacher（先生が好きが好き）」まであるのが、いかにもイン

していました。同期の仲間とは祭りやお互いの結婚式で会ったりするほか、今流行のSNSで情報交換しています。同期の職業では警官、軍隊、先生が多く、寮生の希望職業にほぼ一致しています。将来は、それぞれの職業を究めてトップを目指したいそうです。

2月25日9時半、全校生徒が校庭に集合し、厳かに朝礼。一昨日の記念式典でインドダンスを踊っていた時とはまるで別人です。神への讃歌、国歌・州歌斉唱の後、点呼。その後、プライマリスクール、ハイスクールの順に授業参観しました。

最後に20周年の記念に、クリスマスツリー（モミ）とハイビスカスを、日本人参加者と先生たちで植樹しました。乾季はほとんど雨が降らない土地だけに、かつて植林した校庭の木々が成長して繁っているのは、先生・生徒たちがこれまで水を与えてくれた賜物です。今回植えた木々も同様に育ってくれることを願ってやみません。

鍵盤ハーモニカ寄贈のお願い



コスモニケタンの生徒たちに何か楽器を届けたくて、今回、鍵盤ハーモニカ2台を持参しました。演奏方法を説明し、先生たちにも試してもらいました。写真。簡単に演奏できるので、ぜひ生徒たちに教えたいと希望されました。

この楽器は通常、小学校1・2年生で使われ、その後、押入れの隅に眠っていることもあるかと思えます。お知り合いにも声をかけていただき、皆さまからご寄贈をぜひお願いします。50台届けたいと考えています。恐縮ですが送料のご負担もお願いいたします。

送り先は、〒550-0002 大阪市西区江戸堀1-2-14 肥後橋官報ビル5F アジア協会アジア友の会 大本宛て ※7月末締め切りとさせていただきます。

今回のコスモニケタン訪問を機に、JAFAアジア里親の会を通して日本の里親から支援を受けている里子の一人、7年生のキラン・ワッダール君（14）の家を訪問しました。担任の先生によれば、彼はとても頭がよく頑張りが得意で、14日（約4.3）の記録を持つているとのこと。

キラン君は学校から2キロ離れたマドバビ村から自転車通勤します。写真右上。家。同右下は一間きりで、部屋の外の地面に、かまどらしい場所が

あるだけの調理スペースがあります。家族は両親、妹、弟2人の計6人。父親はクーリー（建設などに従事する日雇い労働者）で、母親は洋服仕立てをして家計を助けています。月収は6千（約1万円）ですが、生活には7000（約1万2千円）はかかる。と父親は言います。妹と弟たちは公立の別の小学校に通っています。

コスモニケタンに通うと決めたのは親ではなく、キラン君自身だったそうです。設備が充実し、先生たちの指導もよく、評価が高いため希望したそう

です。里親の支援があるからキラン君はコスモニケタンに通っています。訪問した日は祭りで、母親と弟1人は母親の里へ行って不在でしたが、家族4人で迎えてくれました。同左上。彼は毎朝、歩いて5分ほど離れた給水場に、水くみに5往復するのが日課です。将来はカレッジに進学して警察官になるのが夢と話します。

キラン君、頑張れ！
（編集スタッフ 大本和子）

住民と力合わせ水道を建設 家の建て直し ためらう人も



地震で壊れた家屋を修繕した仮設住宅に今も住む村人
＝ネパール、ボテシパ村

ネパール大地震から2年

4月25日で大地震から2年を迎えるネパール。JAFSは一部地域で家を建てるとともに、水源が変わった地域へ飲料水供給を進めています。避難袋を普及させる活動も始めました。ナツプザックに懐中電灯、タオル、軍手、マスク、経口補水液用の粉末などを入れて配り、さらに家々が必要な物を加えてもらいます。万一のときは、これで頭を保護して逃げます。200世帯への配布を目指しています。

被災地では家が盛んに建てられています。一方、まだ多くの人が仮設住宅で暮らしています。その差はどこにあるのでしょうか。飲料水供給を支援しているボテシパ村で、大工のデベンドラさんが話をしてくれました。

「地震の数年前、村人も銀行でお金を借りられるようになり、ローンで家を建てる人が増えた。そんな中の地震で家が倒壊し、途方に暮れた人はたくさんいたよ。国からの支援金はいつ来るか分からず、家を建て直す勇気を持ってない人は多い。そんな中、日本から何人も村に来てくれ、水道パイプラインが設置される。うれしい。一緒に働き、話をしながら時間を過ごすことは、とても有意義で癒される」

JAFSの支援で家を建てられた人

々は「他の人たちも安心した暮らしになることを心から望んでいます」と話します。自分だけ喜ぶのではなく、水道工事のボランティアなど他の地域のために働く姿が印象的でした。

日本からのボランティアに参加者は「村人が私の名を覚えていつも気にかけてくれる。日本ではなくなりかけた隣近所つながりや、他人を気にかける大事さを感じられます。一方、子どもたちはサイズの合わない服を着たり、顔も洗わず裸足で駆け回ったりして、教育面などに多くの問題があることも感じます」と話してくれました。

まだまだ多くの課題があります。今後も村人たちと顔を突き合わせながら一つずつ解決していきたいと思っています。

チャリティーコンサート開催

ネパールの被災者を支援するチャリティーコンサートが2月7～17日、ジャズピアノニスト竹中真先生とサクソフォンの清水利香さんのお二人によって開かれ、5か所全てで大盛況でした。

竹中先生からの感想です。「学校で2回、民族音楽フュージョングループと共演で3回、コンサートをしました。ネパールでこのように即興演奏とフュージョン熱が高まっていることを非常にうれしく体験し、日本でも負けずにやってみたくない」

(JAFSスタッフ 熱田典子)

況とニーズを把握し、支援金や物資を地域の福祉局に回して支援活動の指示を出しました。13年の台風ハイエンの経験が定着してきています。とはいえ、多くの地域が対象になる広域の被害に対する対応では、どうしても地域間に温度差が生じます。

JAFSには26日、AFSビラク・カタンドウアネスから、政府の配布では行き届かない物資の緊急支援の要請が届きました。要請内容から、特に緊急に必要と思われた米や砂糖、缶詰、インスタント麺と若干の生活物資のための募金活動を開始しました。

AFSビラク・カタンドウアネスは1月6日から活動を開始し、ポルタ・サルバシオン村371世帯、アゴホ村254世帯、ブエナビスタ村172世帯、マリリマ村224世帯アンティポト村107世帯、合計1235世帯に食品等を配布しました。

まだまだ片付けや家の修繕など大変な日々が続いていくことでしょう。私たちの支援が、災害に対して回復力のある共同体を目指す人々を応援する一助になっていきます。

昨年の日本への台風上陸数は、統計開始以降2番目に多い6個でした。アジア諸国で起こる被害状況を知り、毎年やって来る台風に備える気持ちを次の世代に伝えることに努めます。

(JAFSスタッフ 永井博記)

フィリピンの台風被災地に緊急支援

食品など1200世帯以上へ



2016年12月に発生したフィリピンの台風被害に対し、緊急募金へのご協力を賜り、誠にありがとうございます。被災したカタンドウアネス島及びパロンバナス島への物資配布支援に携わった現地提携団体AFSビラク・カタンドウアネスのメンバーより、感謝を込めて届いた報告をもとに、現地状況をお伝えいたします。

12月25日、最大風速180km/hの台風ノック・テン(フィリピン名・ニナ)がフィリピンを襲いました。最初の上陸地点はカタンドウアネス島でした。06年以来、JAFSからのワークキャンプなどで交流が始まり、現在も支援事業を実施している島です。翌26日に現地から、フェイスブックを通じてその惨状が伝えられてきました。島全体で75%の家々が破壊され6049世帯が避難しました。

フィリピン政府は、国家災害被災局が事前会議を招集し、被災に備えた対応策を協議。台風上陸後は、被災状

- ⑤ 電柱が倒れた被災地 2016年12月26日、カタンドウアネス島ビラク町
- ⑥ 支援物資の配布に並んだ人々 1月6日、ポルタ・サルバシオン村



「東洋の真珠」を子どもたちの未来へ

スリランカ小学校が植林プログラム

スリランカは日本の九州とほぼ同じ大きさのインド洋に浮かぶ島国です。地域によって気候が大きく違い、豊か



な植物や動物が息を絶えています。仏教の思想からも、生きるものは大切に守られ、生物多様性が残されています。JAFS提携団体のサルボダヤでは、「東洋の真珠」といわれる美しい島を子どもたちの未来に引き継いでいくために、植林に取り組んでいます。2016年11月、ウーバ州パドゥラ県パサラ地区のゴナガール・マハ・ヴィジャヤ小学校で植林プログラムが行われました。校長、先生方、多くの生徒たちは率先して参加しました。始まりの式典では、生徒たちの誓いの言葉がとりかわされました。

- ▽【植樹による地球保全への誓約】
- ▽環境保全は私の心の奥底から始まる
- ▽環境保全は私の学校から始まる
- ▽環境保全は私の村から始まる
- ▽環境保全は私の町から始まる
- ▽環境保全は私の国から始まる
- ▽そうすれば地球規模の保全が全世界で始まるでしょう
- ▽世界のあらゆるところに出来るだけ多くの木を植えます

- ▽そうすれば肉体や精神を癒す健康的な地球が出来るでしょう
- ▽人間だけでなく、この地上の生物全てをも癒す地球が
- ▽植林でこの地球を緑に、もっと緑に、そしてこの上ない緑にすれば
- ▽この地球は宇宙空間で見える唯一の緑の惑星だと
- ▽遠く地球外の宇宙に浮いている宇宙飛行士は言うでしょう
- ▽この夢をすぐに実現しよう、さもないと私たちはまもなく悲劇的な終わりを遂げるでしょう
- ― 私たちは決意します、
- ― 現実となるように―

学校にはまだ約1畝の土地があり、その半分に今後も植林する予定です。植えられた木々を育てていくために、学校の中に「環境保全グリーングループ」と名付けられた委員会がつけられ、水やり・施肥・管理等をする生徒が選ばれ、卒業するとさらに次の生徒が選ばれます。今回は果樹、薬樹、黒檀、ビヤクダン、ジャックなど275本の樹木が植えられました。写真。

また、この学校は乾燥地域にありまして、樹木の水やり用タンクも子どもたちに贈られました。他の乾燥地帯にある学校（パドゥラ地区の2校とアンパーラ地区の2校）でも植林プログラム

地域よくする企画を実行 中国の高校生



プログラムを続けていく予定です。ご協力いただいた日本の皆さんに心より御礼と感謝申し上げます。

(JAFSサルボダヤ クラシリ・ピタナワサム、翻訳・JAFS会員 齋藤公江)

2015年8月に大阪で開いたJAFS第4回アジアユースサミット(AYS)に参加した中国の高校生グループが、その際に企画した「地域をよくするプロジェクト」を実行しました。北京崇徳中和文化発展センターは、北京市から40数キロ離れた郊外に「日新習堂」という拠点を作り、地域の子どもたちのために活動しています。そ

の子たちの大半は両親が出稼ぎ労働者で、親と離れ離れに暮らしています。AYSの「地域をよくするプロジェクト」として高校生たちは、その子どもを元気づけ、健やかな成長を願って寄り添う活動を展開しています。

2016年、「日新習堂」の子ども

迷信から生徒の健康を守る パンドラの

インド中部のマハラシュトラ州ガツチロリにある日印友好学園パダトラ小学校は、2004年にJAFSと現地提携団体RUDYAが協力してつくった学校です。生徒はとても貧しい家庭に育ち、人里離れた深い森林地域に住み、彼らの家族は健康問題を重視していません。ふだんは、村の霊媒師の祈禱で治すプジャリ療法を利用し、迷信

を信じています。そのため、学校が生徒の健康面にも配慮しなければなりません。チャモーンシ地方病院に、生徒の健康診断のために医師や看護師のチームを派遣してもらえよう依頼したところ、2016年10月20日に医療チームが学校を訪れました。教員が生徒一人一人に健康手帳を準備し、医療チームは生徒の健康診断を

たちとともに冬・夏休み中に、本屋巡り、北京への遠足、アメリカ人の子どもとの交流、博物館見学、前ページ写真など、視野を広める文化体験をしました。

(北京崇徳中和文化発展センター 歐陽蔚怡)

私たちはチャモーンシ地方病院の責任者や医療チームの協力と支援に感謝を伝え、頻繁に学校に来てもらえるよう依頼しました。

JAFSの皆さまのご協力に非常に感謝しています。私たちの活動がうま

融資資金の不足が悩み インダの

インドのアダーシ信用金庫は、JAFS提携団体RUDYAが2004年に設立し、16年3月(15年度末)に12周年を迎えました。拠点はマハラシュトラ州ガツチロリにあります。394名の会員があり、この1年で48名増えました。15年度には731万1000ルピーの預金があり、そのうち150名に対し計200万ルピーの口

くいくように、お祈りと祝福をいただきますようお願い申し上げます。

(RUDYA代表 カシナート・D・デオガデ、翻訳・ECC国際外語専門学校 大川梨彩、佐々木麻衣、田中美恵先生)



身体測定中の男子=パダトラ小学校

して、病気の生徒に薬を渡しました。診断の結果、貧血の生徒が多く、にきびがある女子が数人おり、また特に女子生徒に寄生虫感染症が見受けられました。深刻な疾患は幸い見つかりませんでした。



金を融資することができ、今会計年度は成功に終わりました。

会員からはローン増額を要望されていますが、協会はそれに応えられるほど十分な資金がありません。例えば、会員が5万ルピーのローンを申し込んでも、管理委員会で協議し、その会員の財政状況を確認したうえで、最高でも2万5000ルピーしか渡すことができない状態です。毎月25〜30人がローンを申請しますが、資金不足が原因で、10〜15人しか受け入れることができません。このような事情により、JAFSに支援をお願いしています。

16年9月25日に本協会の年次総会が開かれ、写真、ローン完済者を表彰しました。また、協会に関する様々な情報を伝え、JAFSのご協力に感謝の意を表しました。

(RUDYA代表 カシナート・D・デオガデ、翻訳・ECC国際外語専門学校 大川梨彩、佐々木麻衣、田中美恵先生)

(外務省仮訳)

JAFSの目指す方向と一致

JAFSのスローガンが今年の新年号から、「なくそう貧困。命の水を！」に代わったことにお気づきでしょうか。JAFSはこれまで、貧困をなくし、自立した地域をつくる活動を展開してきました。しかし、世界銀行の推計によると、1日1・9ドル未満で暮らす極度の貧困層は、世界人口の10・7%の7億6700万人に達しています。

発展が注目されているアジアは今、貧困層はさらに貧しく、富裕層はもつと豊かに、と大きく二極分化しています。救いは中間層が増えていることですが、富を自国で賄えているわけではありません。海外へ若い人たちが出稼ぎに行き、現金を自国に送り、持ち帰ることで豊かさが生まれているのです。自国の力が育っていません。お金だけが回り、一見、豊かになったかのように感じられています。

そんな中、2015年に開かれた第70回国連総会は「我々の世界を変革する…持続可能な開発のための2030アジェンダ」を採択し、17の目標からなる「人間と地球および繁栄のための行動計画 (Sustainable Development Goals Ⅱ SDGs)」を決めました。貧困を終わらせ、すべての人が平等な機会を与えられ、地球環境を壊さず、より良い生活を送ることができる世界を目指しています。

前記に、17目標のロゴマーク日本語版と、同目標の日本語訳(外務省仮訳)を掲載しました。2000年に国連で採択されたミレニアム開発目標(Millennium

Development Goals: MDGs)は発展途上国が対象でしたが、SDGsは、社会の発展とともに、地球を守るための課題を明確に示し、世界のすべての人々を対象としている点が大きな違いです。16年から30年までの15年間、世界の国々はこの「グローバル目標」の達成に向けて取り組んでいくことになりました。

今、ネパールで、村の若者が仕事を求めて外に出ていくことがないような地域づくりが取り組まれています。農業を主とした産業へ、第1ステップとして飲料水と農業用水を確保し、村全体に1年中安定して供給することを目指していま



家でとれたトウモロコシなどを干して保存する自給自足の生活=ネパール・ボテシパ村

す。村人たちが願うのはまさに「持続可能な地域づくり」です。これまで不可能と思えていたことですが、インフラを整備するとともに村の人たちの意識を引き上げ、体力と栄養分を村の中に蓄えることを、JAFSもともに進めていきます。本プロジェクトの本質は、SDGsの目標11「住み続けられるまちづくりを」に合っています。

また、JAFSは、自分たちの足元を大切にすることを活動方針の一つにあげ、「地球の緑を大切にしよう!」とのスローガンで、自然を感じながら歩くウォーカソンを長年実施してきました。これからも分かるように、JAFSがしている事業は、SDGsが始まる前から持続可能な地球社会を目指しています。

JAFSが掲げる「貧困なきアジアコミュニティの構築」「生まれきて良かったと思える社会地域づくり」とSDGsとは、理念や目指すところが、よく似ていると言えるのではないのでしょうか。世界がSDGsを目指して活動することになった今、JAFSの活動も、今までの基軸をさらに大切にして展開することが使命になるように思います。

まずは、みなさんの身の回りですることを、この17の目標から探してみてください。そしてその次は、JAFSの活動をより深く理解する一助としてもご利用いただき、活動にご参加くださればと願っています。

(JAFSスタッフ 熱田典子)

- | | | | |
|--|--|---|---|
|  <p>1 貧困をなくそう</p> | <p>貧困をなくそう
あらゆる場所のあらゆる形態の貧困を終わらせる</p> |  <p>9 産業と技術革新の基盤をつくろう</p> | <p>産業と技術革新の基盤をつくろう
強靱(レジリエント)なインフラ構築、包摂的かつ持続可能な産業化の促進及びイノベーションの推進を図る</p> |
|  <p>2 飢餓をゼロに</p> | <p>飢餓をゼロに
飢餓を終わらせ、食料安全保障及び栄養改善を実現し、持続可能な農業を促進する</p> |  <p>10 人や国の不平等をなくそう</p> | <p>人や国の不平等をなくそう
各国内及び各国間の不平等を是正する</p> |
|  <p>3 すべての人に健康と福祉を</p> | <p>すべての人に健康と福祉を
あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する</p> |  <p>11 住み続けられるまちづくりを</p> | <p>住み続けられるまちづくりを
包摂的で安全かつ強靱(レジリエント)で持続可能な都市及び人間居住を実現する</p> |
|  <p>4 質の高い教育をみんなに</p> | <p>質の高い教育をみんなに
すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する</p> |  <p>12 つくる責任つかう責任</p> | <p>つくる責任つかう責任
持続可能な生産消費形態を確保する</p> |
|  <p>5 ジェンダー平等を実現しよう</p> | <p>ジェンダー平等を実現しよう
ジェンダー平等を達成し、すべての女性及び女児の能力強化を行う</p> |  <p>13 気候変動に具体的な対策を</p> | <p>気候変動に具体的な対策を
気候変動及びその影響を軽減するための緊急対策を講じる</p> |
|  <p>6 安全な水とトイレを世界中に</p> | <p>安全な水とトイレを世界中に
すべての人々の水と衛生の利用可能性と持続可能な管理を確保する</p> |  <p>14 海の豊かさを守ろう</p> | <p>海の豊かさを守ろう
持続可能な開発のために海洋・海洋資源を保全し、持続可能な形で利用する</p> |
|  <p>7 エネルギーをみんなにそしてクリーンに</p> | <p>エネルギーをみんなにそしてクリーンに
すべての人々の、安価かつ信頼できる持続可能な近代的エネルギーへのアクセスを確保する</p> |  <p>15 陸の豊かさを守ろう</p> | <p>陸の豊かさを守ろう
陸域生態系の保護、回復、持続可能な利用の推進、持続可能な森林の経営、砂漠化への対処、ならびに土地の劣化の阻止・回復及び生物多様性の損失を阻止する</p> |
|  <p>8 働きがいも経済成長も</p> | <p>働きがいも経済成長も
包摂的かつ持続可能な経済成長及びすべての人々の完全かつ生産的な雇用と働きがいのある人間らしい雇用(ディーセント・ワーク)を促進する</p> |  <p>16 平和と公正をすべての人に</p> | <p>平和と公正をすべての人に
持続可能な開発のための平和で包摂的な社会を促進し、すべての人々に司法へのアクセスを提供し、あらゆるレベルにおいて効果的で説明責任のある包摂的な制度を構築する</p> |
| | |  <p>17 パートナリーシップで目標を達成しよう</p> | <p>パートナーシップで目標を達成しよう
持続可能な開発のための実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化する</p> |

水くみ重労働から解放

この村では水は貴重品です。3～5月の乾季には生活用水である寺のため池は干上がってしまい、配給される水を買わなければなりません。農業では全く収入が得られず育牛や養鶏、首都プノンペンへの出稼ぎで収入を得ている村人にとって、水の購入や病気は経済的に大きな負担です。寄贈井戸によって水くみの重労働から解放され、衛生意識も高まり、健康な生活を送ることができます。感謝申し上げるとともに、生活が変わった私たちの村にまた来てください。

【寄贈者】イオングループ労働組合連合会様



タケオ州トレアン郡クバ地区ポン・ロー村
受益者：60名（15世帯、うち女性36名） 井戸形式：露天式（深さ18m）

ご寄付には
税の優遇措置が
受けられます

なくそう貧困。命の水を！

井戸の寄贈にご協力ください。あなたの力がアジアの人々の命を助けます。ご寄贈者に完成報告書、写真、パネル写真を届け、現地の井戸に、ご寄贈者のネームプレートを設置します。

■井戸1基の建設に必要な費用■（地域によって異なります）
インド=55万円 フィリピン=30万円 カンボジア=25万円
ミャンマー=20万円 スリランカ=20万円
ネパール=15万円（パイプライン=25～150万円）
バングラデシュ=浅井戸20万円、深井戸50万円

※5年間のメンテナンス費、現地管理費を含む概算です

・三菱東京UFJ銀行 大阪中央支店 普通 1968711
・公益社団法人アジア協会アジア友の会
・郵便振替 00960-6-10835 アジア協会アジア友の会

■お振込み先■

詳しくはアジア協会アジア友の会
06-6444-0587へ

安全で衛生的な水を確保できないアジアの地域に井戸ができて生活基盤が整い、自立へ一歩踏み出せるようになりました。ご寄贈くださったみなさまに感謝申し上げます。

みなさんのおかげで
井戸ができた村

【寄贈者】唐招提寺様

女性たちの訴えがかなった

マハラシュトラ州ガッチロリ県チャベッラ村
受益者：250名（25世帯）
井戸の形式：ポンプ式（深さ60m）



村には3基の井戸がありましたが人口（1562人）を支えきれず、井戸には長蛇の列ができ、水くみに数時間かかっていました。そのため村から1.5km離れた水路まで水くみに行っていましたが、汚れた水で病気になることが多かったです。村には病院がなく、よほど重病でないと医者に行きません。女性たちは困っていましたが村の会議で発言権はなく、水の窮状を現地のJ A F S提携団体に訴えて支援による井戸ができ、水くみから解放され健康で衛生的な生活になってきました。

【寄贈者】幾谷昌彦様

健康な生活。子どもたちも将来に夢



タケオ州トレアン郡ロネナム地区ソピー村
受益者：66名（12世帯、うち女性36名） 井戸形式：露天式（深さ28m）

イ・サウさん（59）は多くの村民のように、長年の水くみと農作業で腰痛に悩まされていました。少し離れた寺のため池へ日に2～3回生活用水をくみにいきます。水は衛生的ではなく病気の原因になり精神的、経済的に生活を圧迫します。農業では現金収入が得られず、育牛や養鶏、経済発展の目覚ましい都市部の縫製工場や建設現場への出稼ぎで得ています。井戸によって健康な生活を送れます。子どもたちも学校へ行くことができ、将来の生活に夢を持つことができます。

支援あってこそその深井戸実現

【寄贈者】唐招提寺様

唐招提寺様に心より感謝申し上げます。今まで、遠くの、それもため池の非衛生的な水に頼っていましたが、井戸ができたお陰で水くみの時間や重労働、水による下痢から解放され、精神的・経済的にゆとりができました。下痢は体力を奪い大きな病気につながります。長年役場へ井戸を要望していましたがかなわず、女性が現地のJ A F S提携団体に相談してやっと実現しました。貧しい村では60mもの深井戸を掘ることはできませんでしたが、寄贈井戸により徐々に生活を向上できます。



マハラシュトラ州ガッチロリ県ハルケタ村
受益者：390名（50世帯）
井戸の形式：ポンプ式（深さ60m）

安全な水で衛生観念が向上 【寄贈者】イオングループ労働組合連合会様

水は生きるため必要なのに、寺のため池が唯一の生活用水であるこの地を、先祖はなぜ生活の場にしたのでしょうか？ 村人は稲作に頼る生活ですが、自給農業で現金収入はありません。育牛や養鶏、出稼ぎが現金収入源です。井戸ができる前、乾季はため池が干上がり雨も降らず、水を買うしかありませんでしたが、水の購入や汚れた水による病気は経済的負担でした。寄贈井戸によって安全な水を得ることができ、衛生観念が向上し、生活が変わります。ありがとうございます。



タケオ州トレアン郡クバ地区ポン・ロー村
受益者：87名（14世帯、うち女性45名）
井戸形式：露天式（深さ約18m）

水道で野菜栽培も再開

高さ1,000m超の山の頂上周辺にあり、交通の便が悪く開発が遅れている村です。水に恵まれた土地でしたが、昨年の地震で大きな被害を受け、水源が変わり水が減少し、暮らしは一変しました。水不足で野菜を育てられず、湿疹やビタミン不足の症状が出てきました。水源から水を集めるタンクを設置し、5本のパイプで住宅エリアに水場を作り、地震前に近い状態で生活できるようになりました。野菜も作れるようになり、寄贈いただいた水道のおかげで村人にも笑顔が戻ってきました。



【寄贈者】株式会社グローアップ様

バグワティ県シンドウパルチヨーク郡ボテシパ村
 受益者・150名(35世帯)
 井戸の形式・貯水タンクよりの水道式水場

長年待つようやく実現

村は交通の便が悪く病院がないので、少々の病気では医者にかからず重症になってから町の病院へ運び込まれていました。特に非衛生的な飲料水(ため池の水)による下痢は体力を奪い他の病気を誘発します。長年、役場に井戸を要請していましたが実現せず、村の3人のリーダーが現地のJAFS提携団体に相談し、やっと実現の運びとなりました。衛生的な井戸のおかげで健康な生活を営めます。要望に応じてくれ井戸を寄贈下さった唐招提寺様に心からお礼申し上げます。



【寄贈者】唐招提寺様

マハラシュトラ州ガッチロリ県カルワフア・トツラ村
 受益者・130名(30世帯)
 井戸の形式・ポンプ式(深さ60m)

【寄贈者】中宮寺様

バグワティ県シンドウパルチヨーク郡ボテシパ村
 受益者・150名(35世帯)
 井戸の形式・貯水タンクよりの水道式水場



地震後、元の暮らしが戻った

1,000m超の山の頂上周辺の村で交通の便が悪く開発が遅れ、村人は昨年の地震後に各自が建てた粗末な仮設住居で暮らしています。地震後水源が変化し、比較的水に恵まれていた集落も水不足に悩まされました。今までの野菜作りもできなくなり、湿疹やビタミン不足による症状が出始めました。寄贈水道のおかげで水が確保できたものの、地震による水量減少で一日6時間の制限を設けざるを得ませんが、元の暮らしが戻って来て村人も安心して生活を送れるようになっています。

【寄贈者】NITTOグループ様

ヌエバエシハ州カピオア町バゴン・シカット小学校
 受益者・生徒24名、先生・職員18名
 井戸の形式・ポンプ式(深さ35m)



トイレ後に手が洗える

村人の大半が農業で生活していますが現金収入にはつながらず、畜産や、首都マニラや海外への出稼ぎに頼っています。井戸ができるまで生徒たちはトイレの後に手洗いも出来ず、感染症の原因になるため、先生は大変心配していましたが、寄贈井戸のおかげで衛生教育につながると喜んでいました。この井戸を利用して、フィリピン教育省が推奨する有機農法菜園の建設も予定されています。カピオア町は人口密集地のため水不足はまだ解消されておらず、井戸の必要性は高いままです。

地震後に水で戻った笑顔

幹線道路とつながっていないため交通網が発達しておらず、開発が遅れている村です。昨年の地震で大きな被害を受け、村人は自身で建てた仮設小屋で暮らしています。以前は比較的水に不自由しない土地でしたが、地震で水源が変わり生活が一変しました。水不足で野菜を作ることができず、湿疹やビタミン不足の症状が出始めました。寄贈により新たな水源から水を集めるタンクを作り、住宅エリアにパイプを引き水場を作りました。ようやく村民にも笑顔が戻ってきています。



【寄贈者】大阪府立天王寺高等学校FAN様

バグワティ県シンドウパルチヨーク郡ボテシパ村
 受益者・150名(35世帯)
 井戸の形式・貯水タンクよりの水道式水場

地震後も水が「生きる」力に

村は標高1,111mの高地で非常に乾燥しており、樹木がなく赤土で、収穫が少なく農業だけでは生活できず、出稼ぎに頼り、主食の米も買わなければならない貧しい村です。今まで遠くまで水くみに通わなければならず、一日の大半を水くみに費やすありさまでした。パイプラインのおかげで住宅エリアに水くみ場ができ、生活水の確保と葉野菜の栽培も可能になりました。水場の完成後に地震に襲われましたが、避難生活の中、水だけは確保でき、「生きる」大きな力となっています。



【寄贈者】岸本 玲子様

バグワティ県シンドウパルチヨーク郡ボテシパ村
 受益者・140名(30世帯)
 井戸形式・水道パイプライン(水場3ヶ所)



被災者の自主活動サークル「絆」のみなさん。ポ
ーチを製作中。3月1日、熊本県益城町東無田公民館

避難所から仮設住宅、そして未来へ

4月16日で熊本地震から1年を迎えます。3月11日で東日本大震災から6年が経ちました。阪神淡路大震災からは、はや22年目に入っています。

私自身、災害を常に意識するようになったのはこの10年かも知れません。子どもたちの自然学校に携わっているため、普段から気象情報には関心を払って、救急キットを身近に置くようになっていました。そのような活動が非常時に生かされると信じてきました。しかし、熊本地震でも、圧倒的な自然の驚異の前ではほとんど役に立たず、人間の微力を改めて思い知りました。

地震直後に熊本県益城町を訪れた私の目に飛び込んできたのは、クラッシュした家、引き裂かれた大地、沈痛な人々の表情。「今ここで何が必要とされているか?」「私達がやるべきこととは?」と頭をよぎります。ようやく避難所にたどり着いた人。避難所を諦めテント泊、車中泊、またビニールハウスや馬小屋で一時を凌ぐ人々。それぞれが必死な様子でした。

避難所での半年は被災者にとって、傷ついた心をリハビリするような時間でした。11月末に全避難所が閉鎖。被災者と一緒に、私たちが仮設住宅へと活動の場所を変えました。

壊れた家屋などの解体は遅々として進んでいません(昨年末で約50%)。2月末の益城町では体調を崩す人も多く、冬の寒さを耐え忍んでいました。

高齢者が多く、農村部では後継者が都市へ出てしまっています。家だけでなく道具もすべて失い、農業を再開するのは至難の業と思われました。

ただ、皆さんは少しずつ立ち上がっています。仮設住宅に住みながら自宅の瓦や木片を片付け、公費での解体を待つ人もたくさんいます。仮設の集会所では、被災者自身の手によるカフェやサロンが開かれ、体操や健康づくり教室で少しでも明るく楽しく過ごそうとされています。

昨年12月に益城町復興計画が策定されました。「未来を信じ共に歩もうみんなの笑顔のために」をテーマに、子どもたちが描いた「未来の益城町」の絵をシンボルにし、復興は少しずつ進んでいます。私たちがお手伝いしている東無田集落でも益城町初の復興委員会が発足し、新しい街づくりの一歩が踏み出されました。

被災者の自主活動グループも生まれています。手芸サークル「絆」は、仮設住宅入居が始まった頃から、健康体操、バッグやポーチ等の製作などを行っています。日本航空でそのポーチが販売されることになり、張り切って縫っておられます。材料は全国から贈られた着物などです。JAFSから裁縫箱を贈らせていただき、少しですが協力できました。今後でも微力ながら尽力したいと思っています。

(JAFSスタッフ 山竹継男)

他国のことを考える機会にもなり、14年続いていきます。将来は国際支援活動に携わりたいと語る生徒もいます。

一方、14年前のネパールではクリスマスを知らない子がほとんどでしたが今は皆知る日に。そしてお礼カードに描く絵は無色でしたが、素敵な色合いの絵になってきています。同下。文具一つが長年続くことで日本とネパールの子たちの大きな成長へつながり、心の交流から生まれた絆があります。

(JAFSスタッフ 熱田典子)



クリスマスプレゼントで心の交流14年

武庫川女子大学附属中学校・高等学校の生徒会では、毎年クリスマスになると、アジアの友にプレゼントを送ろうと学校中に呼びかけて文具を集めます。女子ならではのかわいいキャラクターのイラストをつかみます。そのうえ日本製は品質が抜群!

日頃プレゼントをもらう機会がほとんどないネパールの子どもたちは、昨年鉛筆や色マ



ネパールの家庭カレーと踊りで交流

「国際協力&異文化交流パーティー」ネパール編「世代を超えて」を1月22日に開き、ネパール、タイ、中国、台湾、ベルーから13名、日本は中学生から社会人まで120名が参加しました。身近に異文化を楽しむ、友達や社会貢献の輪を広げることが目的です。

本格的なネパールの家庭カレーとチャイで、笑顔と会話が広がりました。JAFSの熱田典子さんから2015年の地震後のポテシバ村復興や新たな村作りの報告がありました。「松原どうすいの会」から寄贈した井戸は地震でも壊れず、人の命を守ったことに感謝を受けました。「来年はポテシバ村の黒豆や干し柿が食べられるかも。楽しみね」の声も聞こえました。

ネパールの子もエソダちゃんを応援している松原第3中学校から「募金活動で多くのことを学び貴重な体験

です」と報告がありました。アジアユースサミット参加校の松原高校は、スタディツアーや交流の様子をネパールの人と一緒に報告しました。

最後は皆で「レッサンピリリ」の歌に合わせたダンスで盛り上がりました。たくさんのお出合いがありました。募金もたくさん寄せられました。人の温かさや和の心で満ちた一日でした。*松原市ボランティア連絡会助成事業 (JAFS第4エリア幹事 橋本末子)



「アーユボワン」で始まる スリランカ講座

2月18日午後3時、JAFS事務所会議室は満席の賑わい。司会の「アーユボワン」(シンハラ語で「こんにちは」)の挨拶でスリランカ講座が始まりました。講師の先生は京都大学大学院で言語学専攻のドウルニ・ジャヤス

ーリヤさん。「スリランカはどんな国？」とまずは入門編から。

今回の本題は「スリランカの年中行事」です。スリランカは仏教の国。お釈迦様の生誕、成道、涅槃を祝う5月の満月の日のウエサック祭りは功德を集中する特別の日。肉を食べたり、お酒を飲んだりすることを控え、イルミネーションの飾りで国中が彩られます。ドウルニさんは流暢な日本語で、スリランカの特徴的なくつかの行事を美しい映像で次から次へと説明され

氷点下の雪道、冬の金剛山を歩く

暖冬から一転、今冬の寒気団がやって来た1月14日、JAFS富田林地区会の金剛山登山があり、小生も参加した。標高1125mの山頂は零下5度。アイゼンを付けて雪の山道を踏みしめ、樹氷の彼方の大阪湾の展望を楽しんだ。

JAFS富田林地区会では約20年前からアルミ缶、バザーの販売収益でコツコツと資金をため、ネパールに小学校を4校建設した。金剛山登山もそれにつながるネパールの教育支援の一環で、参加費(一人1500円)から食費の実費を差し引いて支援に充てる。参加したのはリーダー格の沖田文明(JAFS理事(69))と実弟の哲男さん

(67)、JAFS事務局の有山京子さん、沖田さんの友人で金剛山登山歴1750回のベテラン、澤田一郎さん(69)ら熟年世代の7人。写真、左端が私。

午前10時15分。金剛山の登山口には赤や黄のカラフルな登山服を着たハイカー数十人が集まっていた。強風で山頂へのロープウェイは運行停止。この日は大学入試センター試験の1日目。受験生には申し訳ないが、久しぶりの雪山に心が躍る。参加者のうち、健脚の5人は山頂を目指し、2人は中腹までの二手に分かれる。

澤田さんの案内でシルバークロスと呼ばれる沢沿いの道を上る。雪に覆わ

ました。お話が終わってから、スリランカカレーで懇談会。講座の前に、ドウルニさんのご主人(スリランカ人)とJAFS女性会員も手伝ってカレー作りをしており、本場のカレー味は皆さんから絶賛され大人気でした!

スリランカを知り、親しみ、スリランカ料理を楽しんだ講座でした。参加費の一部は協力金としてスリランカの支援に充てられます。(スリランカサルボダヤ友の会代表 船戸康夫)

れた岩の上を滑らないように慎重に歩き、約2時間で山頂の金剛山転法輪寺に到着。近くには葛木神社もある。神と仏が一緒に住んでいる。「金剛山頂」の標識が建つ国見城跡で記念撮影。眼下に大阪の街並みが広がり、海の下に神戸の街が見える。

下りは「ゴーゴー」と風の鳴る馬の背コースの急峻な山道を一気に駆け抜けて約1時間で下山。強風と寒さで山頂では実現できなかった豚しゃぶ鍋を富田林市内の沖田哲男さんの家で楽しんだ。

小生は以前、JAFS会員の佐々靖男さん(高槻市)が主宰していたJAFSの山の会に参加。比良や奈良の山々を歩いた。この会は残念ながら高齢化で解散したが、今回の登山で、神仏混浴の霊峰から元気をもらって帰宅した。(JAFS理事 法花敏郎)

「愛されている」安心が命を育む

大谷タカコさん助産婦半世紀の軌跡を講演

大谷タカコ先生の国連世界平和大賞受賞記念講演会が2016年11月26日、寝屋川市民会館で開かれました。前日の新聞で知ったという飛び入り参加が相次ぎ、満員の盛況でした。

80歳を超えてなお現役の先生は、寝屋川に助産院を開き、半世紀の間に4千人を超える赤ちゃんを「自然分娩」で取り上げられました。大谷助産院のファンは多くいらっしゃいます。

大谷先生とJAFSとの出会いは1997年、ネパール国立チョータラ病院で産婆技術セミナーの講師をしていただいたことです。

「生命を育む」と題した講演は、先生の生い立ちから始まりました。口数の少ないお父様のふとした一言に「父に愛されている」と感じ、生きていく励みになった。「愛されている」という幸せな気持ちは、自然分娩、母乳保育に通じる……と。

自然分娩で自らの力と個々の流れに従って命を産み出すこととともに大切なのは、初乳を与えること、とも話されました。初乳は抗体を含み、赤ちゃんを病気から守る。授乳が母子の絆を深め、赤ちゃんが「愛されている」と感じて安心する。母親の自覚も、自然分娩と母乳保育を通してより豊かに身につく……と。

健康のため、子どもたちの健全やかな心と体を育むため、野菜と小魚を中心にした質の良い食事も勧められ、話を締めくくられました。

(JAFS会員 吉田暢子)

貸ギャラリーで歌声サロン



JAFS歌声サロン「コー」は、2016年9月より月に一度、生駒で開催しています。写真。JAFSスタッフ有山京子さんのピアノ生伴奏で、参加者からリクエストされた懐かしのフォークソングをみんなで歌います。

会場となるのは私が運営する生駒ギャラリースペース「コー」。05年から10年まで、カフェ併設の貸ギャラリーとして生駒の芸術家に愛されてきました。今は生駒でのJAFSの活動拠点として提供しています。

歌声サロンの休憩タイムにはドリンクとスイーツのおやつセットを用意して、皆でくつろぎます。参加費の一部は、インド・チャイルドアカデミーの支援に充てています。

(JAFS会員 辻本選手)

シルクロードと文化交流



JAFSオアシス会は、シルクロード地域を中心に相互の生活や文化を学び、互いに尊重し理解しあう文化交流をするボランティアグループです。

2007年に発会してから様々なチャリティプログラムを行い、子どもの教育支援や農村地域の医療支援、災害被災者支援等をしてきました。

1月に中心メンバーであるジャミラ・ウライムさんのご家族が、中国・新疆ウイグル自治区から来日され、歓迎親会をしました。写真。過去にスタディツアーで現地を訪問したメンバーを中心に20名が集まり、久しぶりの再会を楽しみむにぎやかな会となりました。今年もまた現地で会う約束(9月予定、スタディツアー参加者募集中)をし、今後の活動への思いを新たにしました。

(JAFSオアシス会 小柳二郎)



りさこ様からの遺贈 — 遺贈・遺産相続による寄付 —

昨年、JAFS非会員・りさこ様（プライバシーと守秘義務のためお名前だけにし、親しみを込めて、りさこさんと言います）からJAFSへご自宅マンションの遺贈がありました。

りさこさんは、長らく大阪市の病院等で庶務を務められました。生涯一人で、同居の家族はおられませんでした。肝がんでの闘病の末、一昨年9月に60歳で亡くられました。

「遺言書を書きたい人がいる」という知人からの紹介で、私は、一昨年8月初旬、病床のりさこさんに初めてお会いしました。「もうあかんねん。それで始末つけておこうと思うて」。りさこさんは、痛みを紛らわすため口に入れた水をバリバリかみ砕きながら、他人ごとのように話を切り出しました。「大した財産やないんやけど、お金は親しい人で分けてもらって、自宅はあげよう思った人に断られたから、世の中のために使ってもらいたい」

りさこさんは、母子家庭で育ち、苦労したそうです。お母さんの勧めで庶務の仕事に応募して大阪の公務員になったことがラッキーだったと感謝していました。たばこやパチンコが大好きという豪放な一面と、職場の友人ら

とハイキングを楽しみ、可愛い手編みバッグの手芸が得意という繊細な一面を持ち合わせていました。

「寄付先にご希望や心当たりはありますか？」という私の問いに、りさこさんは「自然に帰りたいねん」と言われました。「貧乏したけど公務員になれて一人で勝手に生きてきた。何も立派なことしてへんし」「それならりさこさんの人生にちなむ団体で」といった対話の中で、パンフレットを渡して公益団体をいくつかご紹介し、自然・女性・貧困・大阪という彼女の人生のキーワードにあうJAFSへの遺贈に至りました。りさこさんは、遺言書の手続を含めて死への準備を終えるや、2週間ほどで息を引き取りました。

一周忌の昨秋、自然葬をした山中を訪問しました。草地に墓石替わりに置かれた10センチ角のりさこさんの石標には、バイバイの絵文字が書かれています。たばこを添えたお花に、山頂から吹き抜ける初秋の風につけて赤とんぼが一匹舞い降りてしばし羽を休めた後、スツと飛び去りました。「りさこさんがバイバイしたね」。墓参者の笑顔が秋空に広がりました。家族は無かつたけれど、友人に囲ま

れ、自然と趣味を愛し、自由に生きたりさこさん。そんな彼女の人生最後の想いがJAFSに託されました。彼女の眠る桜の木の下から空と海を越えて、資金はフィリピンでの植林・井戸・子ども支援の事業、バングラデシユでの水供給事業、モンゴルでの保育園設立事業などに使われる予定です。また一部はJAFSの基本財産に組み込み、りさこさんを長く顕彰していくことになりました。JAFSにはその信頼を裏切らないしっかりとした活動を行う責任があります。

りさこさんのようなケースは稀でしょう。ただ、人生の締めくくりにあたって、自分の死後も続いていくだろうものに自分の想いを形として遺したい、そんな気持ちは誰にでもあるのではないのでしょうか。残される家族への配慮は当然のこととして、「未来の地球や子どもたち」への人生最後のプレゼントとして、わずかでも遺贈や相続寄付をお考えいただければ幸いです。

なお、私が所属する「日本環境法 律家連盟（JELF）」が「日本野鳥の会」ほかの環境保護団体およびJAFSと連携した「みどりの遺言」のリーフレットを同封しております。選択肢を検討して信頼できる団体に寄付する文化が広がることを目指す活動です。ご理解・ご協力ください。（遺言執行者弁護士・JAFS理事 池田直樹）

遺贈による寄付とは
生前に残された遺言にしたがって、ご自身の貴重な財産の全て又は一部を、遺贈としてご寄付いただくことができます。

遺産相続による寄付とは

相続された財産の全て又は一部を、ご寄付いただくことができます。寄付分の相続財産に係る相続税については非課税扱いの対象となり得ます。

ご相談からの流れ

- ← ご相談⇒弁護士との面談
- ← 寄付団体との協議⇒寄付の調整
- ← 書類の作成⇒遺言書等の作成
- ← 遺言執行⇒相続開始
- ← チェック⇒寄付金活用の確認

※詳しくは、JELF「みどりの遺言」のホームページ（<http://jelfjustice.net>）、または、JAFSのホームページの寄付ページ（<http://jafs.or.jp/donate/online/>）でもご覧いただけます。

株式会社 クレコス

クレベが作ったコスメで、クレコスという自然派化粧品を製造販売しています。奈良で24年前に創業、老健施設へのメイクボランティアやアジア協会を通して井戸寄付（27基）など行っています。加えてクオンソーシャルプロダクトツファームを立ち上げ、写真、日本に残された自然と共に生しながら、次世代のために

利益を生み出す取組みを始めました。1. 農業に未来を：耕作放棄された大和高原の茶畑を再生し化粧品原料として使う。2. 福祉に未来を：障がいのある人が働く授産施設で原料の抽出、商品製造に共に取り組む。3. 森林に未来を：特定の山から間伐材を切りだし、パルプにしてパッケージとして使う事により森林保護への提案。

これらの取組みが評価され、一昨年ソーシャルプロダクトワールド大賞を、昨年はジャパンメイドビューティアワード最優秀賞など様々な評価をいただいております。

日本の始まり奈良からソーシャルカンパニー



奈良市神殿町 572-1
☎ 0742-64-7272
代表取締役：
暮部 恵子

株式会社 傳來工房

傳來工房では、平安時代より約千二百年、永年に渡り培われてきた鋳造技術やデザイン力を通して、寺社仏閣の装飾金物の製造や全国の主要建築物における重要文化財の復元工事等の実績を重ねて参りました。

近年では、自社ブランドであるデイズガーデンを全国に展開しています。デイズ



京都市南区吉祥院新田武の段町45
☎ 075-681-7321
代表取締役社長：橋本 和良
ご担当者：総務部 大鋸 康範

後も長い歴史の中で培われた技術を生かし、重要文化財の復元や建築物の装飾金物など、「後世に誇れるものづくり」を続けて参ります。

ガーデンは、おしゃれでこだわりのある生活者様やエクステリア専門店様から圧倒的な支持を受ける、今までにない差別化された業界初のプレミアムガーデンエクステリアブランドです。今後は、デイズガーデンをアジアを初めとした全世界に展開していく予定です。また、鋳造部門に関しては、今

企業や労働組合、各種団体は、それぞれの理念に基づいて活動していますが、いろいろな形で社会の役に立ちたいという気持ちは私たちと同じです。アジア協会アジア友の会の理念にご賛同、ご協力くださっている法人会員を紹介します。

新・The 社会貢献

住まいにあふれる笑顔とやすらぎが喜びです

里子の笑顔

勉強したくても経済的な理由で学校に行けない、進学を断たれる。アジア協会ではそんなアジアの子どもたちを里親制度で支援しています。今回はバングラデシユの里子の生活をお伝えします。

「アジア里親の会」 里親募集

- 対象国はインド、カンボジア、ネパール、バングラデシユ、フィリピンです
- 会費は里子1人年額20,000円。複数も可です
- 里親には、里子の写真や成長記録をお届けします

高校教師になることを夢見て学ぶ

メグラは中学1年生（現地の6年生）。数学が好きで家から2km以上の道のりを毎日歩いて通い、将来は高校教師になることを夢見て学習に励む女の子です。父親は1軒以下の小さな田んぼを所有する零細農家。その父親の稼ぎが一家の唯一の収入です。自分の田畑の栽培と収穫の時期以外は、他人の畑で働いています。

母親は主婦で、家事のかたわら二ツトリを育て、わずかな副収入を得ています。姉は高校を卒業して仕事を探していますが、貧しい家計のために諦めました。妹は小学4年生で、学校は無償のため、毎日通うことができています。これがバングラデシユの一人の少女の現状です。現在、バングラデシユをはじめとする南アジアでは、初等教育の就学率・卒業率ともに向上していますが、高等教育になると学費を出すことが困難になり、極端に進学率・就学率が落ちるのです。



メグラのような子どもたちが最低でも高校まで卒業し、可能であれば大学に進学できる準備を中高の間にできるようにと、アジア里親の会では、バングラデシユの子どもたちを6年生から支援しています。メグラやその他多くの子どもたちが、描いている夢に向かっていけるようにご支援ください。（JAFSスタッフ 熱田典子）

アジアの友から



パキスタン、ギルギットバルティスタン州フンザ
シエル・A・ジャン

—日本語研修のための4度目の来日時、JAFSを訪問されました—
子どもの頃、父が管理の仕事をしていたフンザのアルチット城には色々な国の人が観光に来ていました。中でも日本人はとても親切で優しいのが印象的で日本が好きでした。イスラバードのナマル大学で1年半日本語を学びツアーガイドとして旅行会社に就職。登山や観光でフンザを訪れる日本人たちはフレンドリーで、多くの友人ができました。JAFSとの関わりは、2005年のパキスタン地震後にJAFSが緊急支援で来たときに、会社から通訳として派遣されたのがきっかけです。仕事ではありましたが、JAFSの人たちと最後まで一緒に支援活動ができたのがとてもうれしく思い

夢に向かい日本語を忘れないために

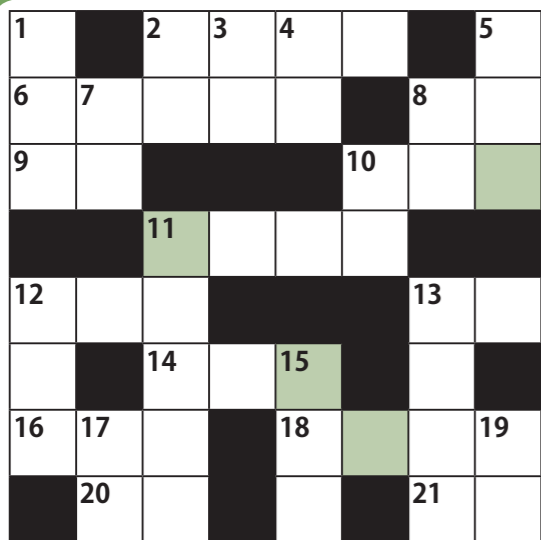
ました。日本に行つて緊急支援活動の報告会にも参加しました。NGOの活動に参加して、互いに交流を深める大切さを学びました。
2007年以降、パキスタンはテロ事件により危険と思われ、フンザは観光客が減り、経済も不安定になりました。当時はテロのニュースを見るのが日課で、人の集まる所には怖くて行けませんでした。ガイドの仕事も減り、日本語を話す機会もなくなりました。今はフリーのガイドとして仕事をしていますが、将来はフンザでホテルを経営し、多くの外国の方に来てもらい、村人の雇用にも役立ちたいという夢があります。
パキスタンは日本と同じく四季があります。フンザは石造りの家が並ぶ美しい村で、春には杏の花で一面がピンク色に埋め尽くされます。2月にはポフォ（種植え）、3月にはナウローズ（旧新年）、7・8月にはギナニ（収穫）、12月はトミシャリ（冬の始まり）と折々の祭もあり、ウツタル山のトレッキングは好評で、素晴らしい渓谷も見ごたえがあります。皆さん来てください。（インタビュー… JAFSスタッフ 佐藤眞子）

環境コラム

今号は趣を変えて、環境クロスワードパズルを作ってみました。よろしければ解いてみてください。

初めて作成しましたが難しいですね。最初、環境ワードを先に決めてマス目に当てはめようとしたら、ワードが都合よくクロスして限られたマスに収まるなんてあり得ませんでした！当たり前ですね。ワードの意味よりマスに最密に収まることがワードの選定条件のようです。それでも環境コラムですからワードの意味も多少考慮した結果、パズルの質として駄作です。愛想でおつき合い頂ければ幸いです。

環境クロスワード



答えは緑マス4文字をつなげた語です。

裏表紙のJAFS宛にハガキまたはFAXまたはメールで、答、アジアネットの感想、住所・氏名を連絡いただきますと、先着10名様に心ばかりのアジアグッズをお送りいたします。是非どうぞ！
▼タテのカギ：(1)縮毛を大きく膨らませるパーマヘア(2)最新の温暖化対策国際ルールは(3)協定(4)を逆さまに読む(4)口を逆さまに読む(5)フィリピンで海の浅瀬に植林する木は(6)ロープ(6)体を洗った湯に浸かったり(7)京都の茶どころ(8)いちいち(9)かみつか(10)日本の湖にいる外来魚ブラック(11)ゴミにするより回収再生(12)アジア協会(13)友の会(13)再生活可能エネルギー
生可能エネルギーは昼間だけ使えるのは(14)日光(15)サイコロ目目が描かれたパイ、(16)倒しで有名(17)を逆さまに読む(18)競馬で走る動物 ▼ヨコのカギ：(2)きついカールの短髪でちよつと強面(3)一(4)再生可能エネルギーで白い3枚羽根を回して発電(8)ネパールのエコなバイオガスは牛の(9)から作る(9)住宅街の合間の車の通らない狭い道(10)レジ袋をもらわないでマイ(11)で買物(11)リサイクルより繰り返し使う(12)がよりエコ(12)挨拶の読み(13)温暖化の原因二酸化(14)素(14)コスモニケタンがある国(16)走るより遅い動き(18)昔から口伝えられる各地方の歌(20)SM(21)気が合う(22)が合う
（編集スタッフ 川本裕子）

アジアネットの感想募集

編集部では、より読みやすく伝わりやすい誌面を目ざし、読者の皆様からの率直な感想（誌面の体裁、記事の内容など何でも）を募集します。編集部へEメール(jafs_koho@jafs.or.jp)で、氏名・連絡先を記してお寄せください。ハガキ・FAXでも受け付けます。

入会ご案内

会員となつてサポートして下さることで、安定した活動計画ができます。継続した活動をしていくためにも、ご協力をお願いいたします。

- A. 維持会費 年額1口 12,000円 (月額1,000円)
- B. 賛助会費 年額1口 6,000円 (月額600円=振込手数料含む)
- C. ジュニア会費 (高校生まで) 年額1口 1,000円
- D. 団体会費 年額1口 20,000円
- E. 法人賛助会費 年額1口 50,000円

会費・寄付の振り込み先
郵便振込
00960-6-10835 アジア協会アジア友の会

編集後記

今号は「日印友好学園」を特集。それに比べ、国有地の不透明な土地取得が問題になっている「森友学園」は…。アア。（敏）

多岐にわたるプロジェクトやプログラムから多くの未来への希望が伺える記事になりました。子供たちが生き生きと過ごせる明日になりますように！（博）

人は水がないと4〜5日で死にぬ。あれば2〜3週間は生きられる。世界で飲料水を十分得られない人が11億人。僅でも役立てばと会員を続けている。（岩）

数日前から鼻が…そう言えば一昨年も去年もこの時季に…うすうす感じながら息子からうつった風邪！と信じてます。アジアの友に花粉症はあるの？（川）

大好きな桜が楽しめるこの時期もある。大阪近辺の杉だけでも「無花粉の杉」にしてもええなものかと切に願う。（和）

春大地から木々から命が芽吹く時。自分の中から何を芽吹かせるかは自分次第か。自分に何ができるかチャレンジの芽を吹かせたい。（真）

今回コスモニケタンの始まりから現在までの写真をアジアネットに掲載するために探し、コスモニケタンを良く知ることが出来ました。良かった。（金）



募金にご協力をお願いします

アジアの安全な飲料水がない地域で
貧困に苦しむ人々を支援する活動に使われます

郵便振替 00960-6-10835 アジア協会アジア友の会

編集・発行：公益社団法人 アジア協会アジア友の会

〒550-0002 大阪市西区江戸堀1-2-14 肥後橋官報ビル5階

☎ 06-6444-0587 FAX 06-6444-0581

URL：http://jafs.or.jp E-mail：asia@jafs.or.jp

2017年4月129号 発行人：萩尾千里 編集人：村上公彦

広報企画委員長：法花敏郎 編集アドバイザー：黒沢雅善

編集スタッフ：佐藤眞子、永井博記、岩崎準一、大本和子
金井英夫、川本裕子、安田剛大

編集協力：ECC国際外語専門学校/ECC Translation Club

印刷製本：あさひ高速印刷株式会社



▲フィリピンを襲った台風「ノックテン」で被災、食料が足りず、落ちたココナツで空腹を満たす子ども 2016年12月28日、カタンドウアネス島。13ページに記事

◀表紙の写真 開校20周年を迎えた日印友好学園コスモニケタンで、先生の講義を目標を輝かせて聴く生徒たち。「貧しい者も平等に」の学びの原点がここにある 2月25日、インド、カルナータカ州。4511ページに特集記事